

ナースチャになりたかった林震

—— 王蒙《組織部に青年が来た》試論 ——

高 屋 亞 希

1 はじめに

王蒙の短篇小説《組織部に青年が来た》⁽¹⁾（以下《組織部》と略稱）は、百花齊放・百家争鳴期を代表する反「官僚主義」小説、とされている。

小説は、青年党員の林震が、ポケットにニコラーエワの反「官僚主義」小説《トラクターステーション所長と主任農業技師》⁽²⁾を忍ばせ、憧れの党の組織部に、新たに赴任してくる場面で始まる。期待と緊張の面持ちで組織部に着任した林震はほどなく、党の政策任務を率先して遂行する筈の組織部で、必ずしも任務が迅速に遂行されていないことを発見する。林震は問題の解決を圖ろうと、上司に働きかけるが、上司は林震が提起した問題を迅速に取り上げようとしない。組織部内で孤立感を深める林震は、折に觸れてニコラーエワの小説によって、自分が置かれている現実を参照しようとする。ニコラーエワの小説では、主人公のナースチャが組織に提起した問題は解決されるのに比して、どうして現実の中國では小説の通りにならないのか、なぜ自分はナースチャになれないのか。林震は終始、理想とするニコラーエワの小説世界への憧憬と、小説の通りに進行しない現実への不満との間を行き來し、それがこの《組織部》という小説の言葉を構成している。つまりこの小説は、林震が中國のナースチャになろうとして失敗した物語だ、と要約できよう。現実の中國の官僚組織では、林震のナースチャになろうとする試みが、失敗に終わる状況を描くことによって、この小説は反「官僚主義」小説となり得ているのである。

しかし、それは些か奇妙なことである。と言うのも、林震は期待感で胸を膨らませて組織部に赴任してきた時に、このニコラーエワの反「官僚主義」小説をわざわざ携行していたことが、小説の冒頭部分に記されているからで

ある。つまり、もし林震がニコラーエワの小説を、反「官僚主義」を實踐するマニュアルとして読んでいたとするならば、林震は組織部に「官僚主義」の問題が存在するか否かも不明な時點で、「官僚主義」問題を自らの手で解決しようとしていたことになるだろう。ニコラーエワの小説を、反「官僚主義」の實踐マニュアルとして読んでいなかったとすれば、林震は如何なる點に於いて、ナースチャをモデルと仰いでいたのだろうか。本稿では、林震のナースチャになりたいという願望が、具體的にどのようなものであったのか、ニコラーエワの小説をてがかりにして考えてみたい。

2 林震の組織部に寄せる期待

1956年3月、それまで小學校の教員をしていた林震は、党の區委員會組織部に拔擢されて赴任する。林震は、この赴任が自分にとって「新しい生活の始まり」(p4)であることを強く意識しているが、これは單に職場が変わったことを意味しない。

彼は常に焦りでいらいらしながら、自分を鞭打っていた。〔それは〕社會主義の高まりに促されて、全國青年社會主義積極分子會議が召集されたことによるものだろうか、それとも年齢が増えたことによるものだろうか？彼は既に22歳になっていた。彼は中學1年の時に、“私が××歳になった時”という題で文章を書いた覚えがあった。“22歳になった時、私はきっと……”と書いたのだが、現在〔その〕22歳。彼のこれまでの生命の歴史は、さながらまだ白紙のままだった。手柄もないし、創造もない。冒險もないし愛情もなかった——誰か女の子にラブleterを書いたことすらなかった。彼は仕事に勵んだが、彼が〔實際に〕成したことは少く、遅々としたものであり、〔自分がかくありたいと思う像とは〕隔たりがあった。〔自分の現在の生活を〕若き積極分子達と比べ、素早く過ぎ去る生活と比べて、どうして自分を慰めることができるだろうか？彼は計畫を定めて、これを學びあれを學び、これをしてあれをしようと、一気に〔自分を〕進歩させようとした。こうした時に、〔組織部への〕配置換えの通知を受け取ったのだ。〔これで自分の歴史に〕“22歳になった時、私は党の工作者となった……”〔と書くことができる。〕しかし

たら、本当の生活がここで始まったのだろうか？彼は小学校教育の仕事や子供達への捨て難い感情を抑え、新しい仕事に対する切望を燃やし始めた。(p6~7)

少年時代の林震がかつて、どのような22歳の自己像を描いていたのかは、不明である。ただ現時点での林震について言えば、自分の生活の中に手柄や創造、冒険等といった要素を望んでいること、また積極分子の生活を自分の生活と比較していることから、廣く社會的に前衛としての價值が認定されているポストに就き、そこで自分の生活を華々しく送りたい、と願っていることが伺える。逆に言えば、林震は教師という自分の職業を、華々しい活躍の場がない、社會の關心度が相對的に低いポストと見做して、焦りを覚えていることになるだろう。⁽³⁾

そうした林震の焦りに對して、書き手は十分に意識的である。積極分子大會の開催によるものか、それとも年齢の増加によるものか、と林震の焦りに解説を加える小説の敘述は、自分と同年代の青年達が社會の前衛として注視され、積極分子大會に参加するのを横目で見ながら、大會に参加することが出来ないまま、年齢だけを重ねていくことに、一人焦っている林震の姿を、読み手に明かしていると言えよう。社會の「素早く過ぎ去る生活」から取り残されていると感じていた林震にとって、區委員會組織部への拔擢は、黨の任務を最先端で遂行する、言わば社會の最前衛に位置する職場で、自分が「本当の生活」を始める絶好の機會、と考えていたことが推測される。

但し、自分も社會の最前衛で活躍したい、という林震の組織部に寄せる期待は、單に職場での實踐を廣く社會的に評價されたい、という個人的な名譽欲でないことには、注意しておく必要があるだろう。なぜなら、林震はこれまでも、教師という職業に熱心に取り組んでおり、それは社會全體から認定された評價とは言えないにせよ、周圍の同僚からは稱賛を受け、その上、教育局からも表彰されていたからである。傍目には順調にキャリアを積み重ねているかに見えた林震が、内心、現實の職業生活で焦りを募らせていたのには、名譽欲とは別の理由が考えられるだろう。

教師になった彼は、依然として高校生の生活習慣を守っていた。夜明

けにはダンベルの練習をし、夜には日記をつけた。また大きな祝日——五一、七一……の前には必ず、あちこちで彼に對する批判意見を人々に求めた。かつて、彼とて3カ月たたないうちに、生活に規律がない周囲の成人達に“同化”されてしまうだろう、とある人は豫言した。ところが、それから間もないうちに、多くの教師達が彼を稱賛し、そして彼を羨んでもいた。“この子は何の憂いもなく、足手まといになるものもない。仕事以外にすることと言ったら、それも仕事だものな……”

(p6)

林震が生活領域の全てを、職業へ傾注していたことが伺える。同僚の教師達が稱賛以外に、羨望を向けているのは、恐らくまだ家庭を持っていないこと等の理由により、自分の生活の全てを職業だけに費やすことが出来る、林震の特別な生活條件に對してであろう。林震自身は自分のこうした生活條件を、特に意識しているようには見えない。だが、ここでも書き手のレベルは周到に、周囲の「成人達」が林震を「子供」と見做し、職業への傾注が彼が「子供」であるが故に成立している、と考えていることを書き込んでいる。職業に傾注できる林震の生活條件を巡って、林震自身と周囲の意識の差は重要だと思われる。何故なら、職業に情熱を傾ければ傾けるほど、現實にはその生活領域から、職業以外の関係を排除していくことになるにも拘わらず、林震の意識の上では、稱賛を寄せる周囲の人々が一向に自分の生活に「同化」せず、職場での自分の奮闘が依然として孤獨なものであることの理由が、理解されないからである。一方、周囲の同僚達から見ると、稱賛に値する働きぶりであることは認めるものの、個々の生活條件を捨象して、自分も林震に「同化」して、教師としてだけの生活を送ることは不可能だ、と考えていたであろうことが推測される。ここからは、教育という職場で、社會の前衛として「本當の生活」を送ろうとする林震の熱意が、逆に他の教師の生活との距離を生み、自分に孤獨な奮闘を強いることになってしまう、という構圖が伺える。推測に過ぎないが、こうした孤獨な奮闘に對する自意識が、前述の社會全體から自分が一人取り残されていて、「本當の生活」を送っていない、という焦りを招いた理由の一つかも知れない。

だとすると、組織部に寄せる林震の期待とは、職場での自分の個人的な奮

闘が、実践面に於いても単に一人のものではなく、職場全体、ひいては社会全体に共有された奮闘であって欲しい、というものであるだろう。換言するならば、自分が送りたいと考える「本當の生活」が、他の人々にとっても「本當の生活」であって欲しい、という期待である。それでは、現實の教育という職場では終に満たされることがなかった、そうした期待を抱く林震は、自分が組織部で「本當の生活」を送るための実践モデルとして、なぜニコラエワの反「官僚主義」小説を選んだのであろうか。⁽⁴⁾

3 ナースチャ赴任以前のMTS

ニコラエワの小説は、ソ連の機械トラクターステーション⁽⁵⁾（以下、MTSと略称）での「官僚主義」問題を扱っている。なおMTSとは、農作業に必要な大型機械や機械手を集中的に配備した機関である。各コルホーズからの國家への供出穀物を集荷する窓口として、國家から割り当てられた、農作物の作付けや供出を指示したり、またそれに必要な種子、肥料、機械等を各コルホーズに供給する役割を擔っている。まず小説の梗概を、簡単に確認しておく。

都市から遠く離れたMTSに、大學を卒業したばかりのナースチャが、主任農業技師として赴任してくる。赴任後まもなく、農業機械の整備や作付け作物の變更等の問題を巡って、ナースチャは從來からのMTS幹部と對立するようになる。MTS幹部達からの命令に違反してまで、ナースチャは、コルホーズ農民の生活向上を第一の目的とする、自分の信念に従って実践する。命令違反に怒ったMTS幹部達が、ナースチャを解任しようと畫策した矢先、ナースチャの実践成果がモスクワの中央に認められる。ナースチャと對立してきたMTS幹部達は、このナースチャの成功を受け入れ、彼女と和解する過程で、自分達が上級からの命令を遂行することだけを念頭に置き、コルホーズ農民のために実践することを考えてこなかったこと、即ち自分達が「官僚主義」に陥っていたことに思い至る。これが小説の要約である。

小説は全篇に亘って、MTS幹部の一人で所長のアレクセイが、かつての自分を反省する立場に立って、ナースチャとMTS幹部達の對立を回想する、という形式をとっている。いつから自分が「官僚主義」に陥っていったのか、アレクセイがその起源を語り始める場面で、彼は「官僚主義」とはまだ

無縁だったMTS赴任以前、即ち學校を卒業したての頃、職場に寄せていた自分の期待を回想する。

私はその頃〔＝學生時代〕信念に満ち溢れていました。〔學校での〕勉強が終わったらすぐにも、自分が様々な労働の奇跡を創り出したり、英雄的な行爲を表すことができるもの、と思っていたのです。だけれどラレウェノーワMTSでは、私が職を割り当てられた場所ですが、いかなる英雄的な行爲をも必要としていなかったのです。〔中略〕區の幾つかのMTSが廣い草原に點在していますが、どの〔MTSも成績は〕悪くなく、『肩を並べて前進』していました。私達のMTSも、他に遅れをとってはいませんでした！契約は毎年きちんと履行できましたし、燃料だって毎年ずっと節約していました。その上、省からの好評を得ていたのです……。一言で言えば、私が英雄的行爲をするような、いかなる必要條件もなかったわけです。(8—p30)

二種類の職業生活が、對比的に示されている。一つは、學生時代に夢想していた、他と比べて前衛的な實踐をする「英雄」的な職業生活。もう一つは、與えられた既存の方法に則って職務を實踐し、各MTS間内部で相對的な優劣を競って上級の「好評」を得るだけの、他と「肩を並べて前進」する現實の職業生活である。後者を「官僚主義」の原因とするアレクセイの反省的な回想は、職業生活に對して學生時代に抱いていた情熱を、ナースチャによって回復する過程として、語られることになる。

ここで重要なのは、學生時代のアレクセイが抱いていた、職業生活に對する期待が、林震が抱いているそれと、表現形式の上で非常に類似している點であろう。理想的な職業生活を送ろうとする意欲を忘れ、現實のMTSで平穩な生活を送っていたアレクセイは、“美しい青春が過ぎ去ってゆく。だのに私は、何か奇跡を創りだしたかということは、言うまでもありません。重大な事件や強い感情、それに深刻な體驗といったものすら、全く經驗したことがないのです……何一つ經驗したことが……”(8—p35)と、しばしば焦りに襲われたことを回想している。このような、理想とする英雄的な生活と、現實の自分の生活を比べて、焦りを覚えるという思考形式は、まさしく

林震のものと言えよう。恐らく林震は、こうしたアレクセイの焦りに共感し、英雄的な「本当の生活」を送る実践モデルとして、ニコラーエワの小説を読んでいたのである。それでは、職業生活への情熱を失っていたアレクセイに、ナースチャはどのように関わってくるのだろうか。

4 ナースチャとMTS幹部との対立

過去を反省するアレクセイの回想は、MTS赴任当時の自分が、學校を卒業したてで年齢が若く、“實際の仕事の経験に乏しかった”（8—p33）點を強調している。所長というMTS幹部職に就任したものの、新しい職務にとまどうアレクセイは、不慣れな自分を陰で補佐してくれた、同じMTS幹部で主任機械技師のアルカーチを信頼し、何事につけても彼と相談するようになる。そのことから、MTSでのアレクセイの職業生活は自ずと、アルカーチの生活をモデルとすることになる。既定の範囲内ながらMTSでの職務を熱心にこなす一方、休日はMTS幹部の仲間達と共に、専ら狩獵や釣りやダンスといった娛樂に興じる生活の中で、アレクセイ達は互いに絆を深めていく。主任農業技師として、ナースチャを新たにMTS幹部に迎え入れるにあたって、アレクセイ達はナースチャがこうした自分達の娛樂の輪に入って、若い女性の彩りを添えて欲しい、という幾分エロティックな期待を向けていたのである。

ところがナースチャは娛樂に加わらないのみならず、MTSの職務についても、これまでの進め方に疑義を表明する。

彼女〔＝ナースチャ〕は會議で發言を求めるのですが、その發言は誰もがとくに知っていることでした……事實上、全て書籍や新聞紙上に書かれた言葉で、彼女はそれらを崇めて金科玉條とし、これまで疑ったことがないのです。だからこそ彼女は、誰もが知っている道理が〔現實の生活で〕破られた時、そのことにひどく驚くわけなのです。（8—p40）

ナースチャが提起する問題が、他のMTS幹部達にとって決して新奇なものではなく、建前としては誰もが知っていることであった、という點は重要であろう。兩者の對立を要約すると、なぜ現實でも教科書等で書かれている

通りに実践しないのか、というナースチャの疑義に對して、他のMTS幹部達は教科書通りに実践するにこしたことはないが、所與の現實自體が理想的ではなく、様々な條件によって制約を受けているのだから、建前に固守することは實踐の上で無意味だ、と考へていることになる。

兩者の對立は例へば、MTSでの修理の職務が忙しい最中に、上級からの命令で農業機械の訓練實習のため、機械手を数名派遣しなければならなくなった時に起きている。アレクセイは機械修理の職務と、上級からの機械手派遣の割り當てとを同時に果たすために、修理に最も役にたたない人材を、派遣要員に充てようとする。それに対してナースチャは、派遣要員に選ばれた人材が、訓練實習を受ける人材として不適當であるとして、アレクセイに選定の撤回を迫るのである。アレクセイにしても、自分が選定した人材が不適當であることは承知している。ただMTS全體の人員不足という條件の下では、この選定は仕方がないものであり、他のMTSでも事情は同様だとアレクセイは考へ、現状を維持していこうとする。アレクセイから見たナースチャは、こうした現實の條件を考へしない理想論者であるが、ナースチャの方は出来る限り理想に従って實踐し、個人的な時間を割いてでも、その全ての職務を完璧に果たすべきだ、と考へていることが推測される。つまりニコラーエワの小説は、職務を最優先とする職業生活の共有を、他のMTS幹部達に迫っていく、という力學で進行していることになる。必要とあらば生活の全領域を職務に傾注する、このナースチャの職業生活は、休日は職務を離れて娛樂に興じるというこれまでのアレクセイ達の生活とは、當然、相入れないものであるだろう。

しかも問題の解決に業を煮やしたナースチャが、直屬上司のアレクセイの頭越しに、上級の省委員會に意見を提出して、その意見が取り上げられたことから、アレクセイ達は派遣人員の選定をやり直さざるを得なくなる。即ちMTS幹部達は上級から、職務の實踐に對して批判を受けたに等しいことになるだろう。他のMTSでも同様の問題を抱えているにも拘わらず、自分達のMTSだけがナースチャのために、上級の批判の對象となったことに、アレクセイ達は腹を立てる。上司の面子を考へしない、ナースチャの性急な問題の解決方法は、これまでの、例へばアルカーチが陰でそっと、實務經驗が不足しているアレクセイを補佐し、MTS幹部達内部での團結を圖っていた

方法とは、正反対だと言えよう。ナースチャのMTS赴任は、職場では互いの不足を庇い合って、職務を滞りなくこなすことによって、MTS幹部同士の関係を親密なものとし、更に娛樂を共にすることで互いの関係を深める、といった従來のMTSでの生活を脅かすものだったことが、見てとれる。

私達は彼女〔＝ナースチャ〕を避けだしました。實を言えば、この1年の間に、私達の何人かの関係は却って、特別に密接なものとなったのです。〔中略〕休日の度毎に、私達は決まって皆で、野兎狩りや狐狩り、狼狩りに出かけたものです。それにスキー遊びなんかもしました。夜には一緒に集まって歌を歌いました。〔中略〕私達は皆、意氣投合していたので、いつも一緒にいました。ただナースチャだけは、〔私達の集まりに〕参加させませんでした。〔中略〕孤獨で獨りぼっち……しかも不案内な場所で。肉親もいなければ、友人もない……（8-p47）

MTS幹部達の對抗方法は、ナースチャを自分達の関係の輪から仲間外れにし、自分達の生活の場では彼女の存在を無視する、という單純なものである。しかしこの方法が、アレクセイ達の主観の上では、自分達の生活からナースチャを排除できるものの、客觀的には兩者の對立要因を取り除くものでないことは、明らかである。事實、ナースチャはMTS幹部達の無視を意に介さないどころか、却って幹部ではない他の機械手達、それにMTS管轄下のコルホーズ農民達と結びつき、彼らとの友情関係を深めてゆく。ナースチャをMTSで孤立させようとするアレクセイ達の思惑は、見事に裏切られるのである。

これ以後も、ナースチャはMTSに問題を提起し續ける。従來と些か異なる點としては、機械手やコルホーズ農民と結びついたナースチャは、彼らの生活の向上を第一の目的に据えた問題提起が目立つ。それは例えば、國家からの作付けの割り當てに關して、各コルホーズの現場に即した作物に變更するよう主張したこと等が、挙げられる。このナースチャの問題提起に對して、MTS幹部達はまたもや讓歩を迫られることになる。⁽⁶⁾ 植え付け間際の急な變更は、種子の確保に奔走させられる上に、植え付けという職務の遂行を巡って、變更のない他のMTSに遅れをとる可能性が生じる。假に任務の

遂行が遅れた場合、當然、上級からの批判の対象にされ、ここでもMTS幹部達は、ナースチャの提起に舌打ちする思いを味わう。

しかしこの対立の挿話も、前述の人材選定を巡る対立と、全く同様の形式と言えるだろう。紙幅の関係で逐一挙げないが、ナースチャとMTS幹部達との間の数々の対立は、こうした職業生活に対する意識の相違が表面化した、ヴァリエーションの反復に過ぎない。この些か単調な対立の反復を終わらせるために、ニコラーエワの小説は別の力學を導入する必要が生じる。

5 ナースチャとMTS幹部との和解

両者の対立は、外部の力の導入によって、意外にあっさり解消する。モスクワのラジオ番組が、ナースチャによって推し進められたMTSでの実践を支持して、全国に向けて放送したのである。このことをナースチャに知らせにいったアレクセイは、彼女と共にこの快舉を分かち合えない自分を見い出す。

私は彼ら〔＝ナースチャとその友人達〕が、そうして喜ぶ様を見ていました。それから自分達を彼らと比較しました。私達はアルカーチやリノーチカとも、時には楽しいこともありました。しかし彼らのとは、どう見ても少し違っていました……戀愛をしたり、ご機嫌とりをしたり、眼で情を伝え合ったり……彼らのここでの喜びは反対に、若々しくて、明るいのです……実際には、私だって共產主義青年団員の年齢をちょっと超えているに過ぎないのですが……私も所長という身分ではなく、共產主義青年団員の身分で、彼らと一緒にサッカーをしたり、運動場を造ったり、また劇の實演に参加したりしたいのにと、ひどく思いました……しかしナースチャはアハハと笑い聲をあげ、ふざけているのに、視線が私とぶつかるとうすぐに、口を閉じて顔をそむけ、私には彼女のあの明るく楽しげな表情を見せまいとするのです。(9-p182)

モスクワの放送の支持によって、いままで自分達と対立する勢力としてしか見ていなかったナースチャ達の関係を、アレクセイは一氣にプラス評價に切り替えようとする。その途端、ナースチャをMTSで孤立させようとした、

これまでの圖式が反轉し、アレクセイは自分の方がナースチャ達の關係の輪から孤立している、と感じ始めるのである。

ナースチャへのプラス評價は、一時的なものに止まらない。全國放送を契機に、多くの人々がこのMTSの實踐成果に注目し、贊辭を寄せるようになる。MTS幹部は自分達にも榮譽がもたらされたことによって、アレクセイのナースチャに対するプラス評價は、揺るぎないものとなっていく。しかし評價の逆轉にも拘わらず、ナースチャの職務に対する取り組みは、全く變わることがない。彼女は依然として問題を提起し續け、周圍の人々のやり方に疑義を唱えては、軋轢を起こすのである。アレクセイはこれまでの對立について、ナースチャに謝罪し、両者は和解するのだが、表面的には二人の關係は何も變わらない。

これ〔＝和解の成立〕以後、私達は依然としてしばしば議論を戦わせたのですが、以前とは少し違って、純粹に事務的な、仕事の上での議論でした……これは職務の上で全く缺くことができない議論なのだ、と私は思いました。主任農業技師は、MTS所長に對して壓力を加えるべきであり、職務に従って議論をすべきなんだってね！もし彼らが議論しなかったとしたら、それは彼らが仕事を愛していない、ということです。ナースチャの助けを借りることで、私はこの問題に對して、このような見方を抱くようになりました。(10—p153)

常に現状に安住することなく、コルホーズ農民の生活向上という目的に立って、問題を提起する。そして、よりよい成果を得るべく、同僚とその問題について議論を交わし、時には對立も辭さない關係を築く。アレクセイがナースチャに見いだしたのは、まさにそうした職業生活の共有を前提にした關係であり、彼自身もこの關係に参加することを選択するのである。ナースチャ達の關係に新たに參加した時點で、アレクセイはかつての自分が、既存の方法に従って職務をこなし、同様のやり方を取るMTSの間だけで優劣を競うことに終始し、コルホーズ農民の生活を視野に入れていなかったことに氣付く。その意味に於いて、自分が「官僚主義」に陥っていたと認識し、學生時代に抱いていた職業生活への情熱を回復しようとするのである。

6 おわりに

反「官僚主義」を實踐するマニュアルとしてではなく、職業生活に對して情熱を回復するマニュアルとして、ニコラーエワの小説を読むならば、職務上の問題點を見つけ、それについて忌憚なく議論を戦わせる、ナースチャとその友人達との關係が、読み手に示されていることになるだろう。自分が「本當の生活」を送っていないのではと焦り、組織部での新しい職業生活に期待を寄せていた林震は、恐らく職業生活への情熱を、組織部の他の上司や同僚達と共有するためにこそ、ナースチャをモデルに選擇したものと思われる。

しかしそうであるならば、林震は、組織部という新しい職場で、具體的な諸問題を見つけて取り組む以前に、何らかの問題について同僚や上司と議論を共有したい、という期待だけが先行していたことになる。つまり林震には、同僚達と情熱に溢れた職業生活を共有する期待はあっても、いかなる立場に立って問題點を見つけていくのか、という確固としたスタンスがなかったということである。

事實、林震には、問題を解決するためには上司との對立も辭さない、という意識は見られない。寧ろ、職務上の問題點を媒介にして、互いに議論しあう關係を上司と共有したいという林震の期待が、現實の上司に裏切られていくことによって、この小説の言葉は成立している。だからこそ、組織部の管轄にある工場での問題が解決された後も、林震の現實への不満は解消されなかったのであろう。また上司が革命に参加した自分の體驗を回想する場面で、上司がかつての情熱を現在の職業生活でも持ち続けているか否かが、林震にとって關心の對象となっていることが端的に示すように、情熱的な職業生活を上司と共有する期待と、上司が職業生活に情熱を失っている現實への失望が、小説の全篇に互って書き連ねられている。つまり林震は、ナースチャによって職業生活への情熱を回復するアレクセイの物語を、自分と上司との關係に於いて、忠實になぞろうとしているのである。

このように情熱的な職業生活を共有する期待が、林震にとって全てに先行していたことについては、小説の冒頭でも先取りされている。この小説は、組織部に赴任してきた林震を乗せてきた車夫が、林震の行き先が黨區委員會

であったことに氣付き、“ここに來たんですか。だったらお代はいりません。”(p1)と申し出た挿話で始まっている。この挿話自体は、小説の後の展開にはつながらないものの、黨、或いは黨官僚である林震に、一般の人々がどのような視線を向けていたのかということを、書き手が示唆したものと言えるだろう。小説には、こうした人々の視線に対する林震の意識が全く書かれておらず、黨組織に対する黨外の人々と林震との意識の差を、示唆しているように思われる。

ナースチャに憧れる林震が見落としていたのは、たとえMTS内で孤立し、解任される危険を犯してまでも、上司の命令を拒否し、貧しいコルホーズ農民達と生活を共有しようとした、ナースチャの孤獨な決断だったと言えるだろう。期待に胸を弾ませ、ニコラーエワの小説を持って組織部に赴任する黨官僚的林震は、黨組織管轄下に置かれる一般の人々に對して、全く意識を缺いていたという意味に於いて、無意識のうちに、自らの「官僚主義」的な立場を選択していたのである。

注

- (1) 《組織部に青年が來た》(初出時の題は《組織部新來的青年人》)であったが、修正稿では、當初の原稿に基づいて《組織部來了个年輕人》に改題)は、『人民文學』(1956年第9期)に掲載されるにあたって、編集者の秦兆陽が、王蒙の當初の原稿を、かなり改作したことが知られている。『人民文學』版が發表された後、王蒙は『一九五六年短編小說選』(人民文學出版社、1957年6月)に修正稿を發表。今日、この修正版が定稿となっている。この問題に關しての主な先行研究としては、辻田正雄『王蒙試論——「組織部に若者がやうて來た」の改削を中心に』(『未名』創刊號、1982年2月)、弓削俊洋『秦兆陽と「組織部」改作問題について』(『野草』第34號、1984年9月)等がある。辻田氏によると、王蒙は修正稿で、基本的には當初の原稿に戻しているものの、改作された『人民文學』版に従っている部分もかなりあるとのことである。本稿での考察、及び拙譯による引用は、定稿版を収めた、『王蒙——中國當代作家選集叢書』(人民文學出版社、1991年6月)を用い、引用頁は本文中の括弧内にアラビア數字で記載した。
- (2) ニコラーエワ(1911~63)の《トラクターステーション所長と主任農業技師》(1954年)の中國語譯は、草嬰譯で『譯文』に連載(1955年第8期~10期)された。辻田氏前掲論文によると、この草嬰譯の單行本が、中國青年出版社から1955年12月に出版されている(筆者未見)とのことである。本稿での拙

譯による引用は、全て『譯文』を用い、引用した雑誌の期数と頁は、本文中の括弧内にアラビア数字で記載した。

- (3) 教師という職業を、社會的位置が相對的に低いポストと見做す認識は、王蒙の長篇小説《青春萬歲》にも見られる。この點については、拙稿『王蒙《青春萬歲》に見える第一次五ヶ年計畫——工業生産を巡る情報交換を中心に』（『中國文學研究』第21期、1995年12月）を参照されたい。
- (4) 《組織部》の本文中にも言及されている（p4参照）が、このニコラーエワの小説自體は、中國の共產主義青年團の推薦圖書になっている。恐らく、林震がこの小説を読んだ直接的な契機は、こうした外在的な理由に求められるであろう。林震の私的な餘暇の使い方は、職業に過剰に傾注したり、或いは國家の推薦圖書を読んだり、個人生活の全領域を規範化しようとする、國家の要求を忠實に果たしていると言えよう。
- (5) 歴史的なMTSは、1958年の解體政策により、所屬していた農業機械や要員は全て、コルホーズやソフホーズに吸収されていくことになる。コルホーズから低價格で農作物を供出させることで得ていた利潤が、工業化を推進するための國家の主要な財源になっていたことは、つとに指摘されている。農作物の集荷窓口であるMTSは、低水準に押さえられて不満を抱くコルホーズを監視する、國家の裝置としても機能していたことになる。スターリン死後の1953年以降、ソ連の農政は全體としてソフホーズ化を推進。MTSを解體し、管轄下のコルホーズ農民を國家の賃金體系に直接組み込むことで、これまでの生活や賃金の格差を原因とする、潜在的な國家と農村、或いはMTSとコルホーズ間の緊張關係を解消していく政策をとった。MTSとコルホーズ間の對立と和解とも讀める、このニコラーエワの小説は、50年代のいわゆる雪解け期のスターリン批判を背景にした、歴史的な產物であるだろう。同時にまた、MTS解體政策までの、わずか數年間の歴史的な條件でしか成立し得ないという意味でも、歴史的な小説であったと言えるだろう。なお、ソ連の農政については主に、中山弘正『ソビエト農業事情』（日本放送出版協會、1981年4月）を参照した。
- (6) ここでの讓歩も、MTS幹部達とナースチャの對立の力學だけで、引き出したわけではない。ナースチャが省委員會書記に直訴することによって、獲得した成果である。ニコラーエワのこの小説は、基本的に外部の力の導入によって、全ての對立關係を解消する、という單純な構成になっている。